
メモリー～君と過ごした日々～

月明かり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリー君と過ごした日々

【Nコード】

N5461E

【作者名】

月明かり

【あらすじ】

冬は嫌いだった。でも彼女に出逢ってから変わった。冬は嫌いでもなく、好きでもなく普通だ。

痛みと独り（前書き）

のんびりと更新していく予定です。

痛みと独り

神様は存在しない・俺はそう思う。

『そんなは事ない。神様はいる。』と言い張る人間に『では神様を見たことがあるのか?』とは聞かない。

『なら何故幸せをぶち壊す?』そう問うだろう。

「・・・ん。」

目を覚ますと目に映ったのは白い天井だった。

体を起こそうとすると全身に痛みを感じる。

寝た状態で見える範囲で腕を見てみると包帯が巻かれていた。

痛む腕を使い、試しに額を触ると布の感触がした。

同様に包帯が巻かれていると察することが出来た。

「ぐっ・・・。」

痛みに耐えながら上半身を起こすと少し離れた場所から声がした。

視線を移すとドアの向こうで白い服を着た女性が俺を見ていた。

刹那

頭の中がグルグルと回転したかのような錯覚に襲われた。

そして記憶が次々と舞い戻ってくる。頭が痛い・・・。

《バシユッ》

テレビが消えるような音と共に突如として頭に浮かんだ2人の笑顔。

「親父・・・？七海？？」

この日から・・・俺は独りになった。
中学2年生冬の出来事。

痛みと独り（後書き）

今回、メモリーを読んでいたきありがとうございます。前書きにもあった通り、のんびりと更新していく予定です。しかし【光】の連載が終わり次第、更新を早めていきます。できれば最後までお付き合ってください。宜しくお願いします。

照る照る坊主と叫び声

「茜！帰ろう？」

チャイムが鳴り響く放課後。

そう俺に声を掛けてきたのは幼なじみの総司だ。

「ああ。」

俺、須藤茜は出入口で待つ彼、中山総司のもとに歩み寄る。

「もう僕はお腹ペッコペコだよ。」

まだ4時だと言うのに総司の胃は食物を欲しているらしい。

・・・大食い野郎が・・・

俺は適当に受け流し、1・3の教室を出た。

「にして明日が楽しみだよね。」

帰宅途中でそんな事を言ってきた総司。

「・・・明日？」

・・・何かあったか？

すると総司は勝ち誇った表情になった。

「雪降るんだって。」

心底嬉しそうに笑う彼が俺には羨ましい。

季節は冬。

吐く息は白く、気温が低いことを物語っている。

「よかったな。」

冬が嫌いな俺はまたもや適当に答えた。

「今年こそはかまくら作りたいなあ。」

九州じゃ無理だ。

ちなみに毎年同じ事を言ってますよ総司さん……。何度無理だと言っても彼は理解しないので

「まあ頑張れ。」

適当に応援した。

「うん。……そうだ!」

右拳を左手の平にポンとのせる。

……閃くな……。

「照る照る坊主逆さにすれば沢山降るかな?」

本当に俺と同じ高校生?

考えが幼いぜ。

その後も総司を適当に相手していると俺の住む年期の入ったアパートに到着した。

「あれ?隣の家……。」

とうとう売れたみたいだ。

引っ越し屋がせっせと家具を中に運んでいる。

「じゃ僕は帰るから。」

「また明日な。」

手を振る総司を数秒見送り、アパートの階段を上り、部屋の前に到着。

ドアを開くとお世辞でも広いとは言えない大きさが慣れた俺にはどうともなかった。

帰宅後、玄関にある写真に向かい俺は毎回こう言う。

「ただいま。」

返事はもちろんない。

あるはずがない。

だって。

《ピンポン》

チャイムの音がしたので取り敢えず扉を開く。

そして開いた先に居たのは・・・大きな布やら長い紐やらを手に持っている笑顔100%の総司。

「一緒に」

《ボタン！ガチャ・・・》

しっかり鍵まで閉めておく。

毎日思うがあの男はバカか？

「開けてよお！一緒に作ろうよ！？」

ええーい、バンバンとドアを叩くな！

無視を決め込み耳を押さえる俺。

静かになったのはそれから30分後の事だった。

・・・粘りすぎだ。

「・・・たく・・・げっ！」

そして俺が驚愕したのはその数十秒後だ。

1度ドアを閉め、また開く・・・がやはり変化はない。

「・・・メンドくさ・・・。」

ほぼ空の冷蔵のドアを再び閉めると立ち上がった。

財布と携帯をポッケに入れ、家から出る。

急ぎながらも写真に『行つてきます』と言つのを忘れなかった。

階段を素早く下りていき、自転車に跨る。

目指すは近所で有名な格安スーパーだ。

約3日分の食料を調達し終えた再度自転車に跨り、来た道を戻る。
思いの外、早めに買い物が終了したため、ある程度ゆっくりと自転車を漕ぐ。

風を感じながら俺の瞳にはいつもの景色が映る。

閉店したタバコ屋・・・

コンビニ・・・

幼稚園・・・

公園で木に登る女・・・

木に登る女??

「・・・なんだ??」

自転車を止め、奇妙な光景を見つめる。

俺の視線の先には白のワンピースを身に纏った女が必死になって木に登ろうとしている。

「・・・・・・・・」

登ろうとしているが全く登れていない。

だが女は諦めずに登ろうとする。

「。。。」

微かに聞こえた。

その瞬間、理解できた。

俺は自転車を置いて、女の横まで移動する。

女は俺に気づかない。

「どいてろ。」

そう言うと女は目を丸くして俺を見てきた。

「あ、あの・・・。」

「どけと言ってる。」

俺は早く家に帰って晩飯を作るというミッションが待っているんだよ！

その思いが通じたのか・・・通じる訳ないか・・・。

ともかく女は木の前から一步横にずれた。

「よっ・・・と。」

なるべく太い枝を手足を使い登っていく。

「結構シンドいな・・・。」

呟くと同時に目標発見！！

ゆううううつくりと近づく。

「よっ。子猫ちゃん。」

「にゃ・・・。」

そう・・・あの女はこの子猫を助けるために木を登ろうとしていたのだ。

それに気づいてしまったのは仕方がないので取り敢えず代わりに救出に向かったわけですね。

「頼むから動くなよ？」

右手で枝を掴み体を支える。

空いている左手を使い子猫を抱こうと伸ばす……成功！！

「もう大丈夫だぞ？」

「にゃ〜。」

しっかりと左手で子猫を抱き、木をどう降りようかと思考を巡らせる。

飛び降りれないこともないが……この状態では え？

「危ない！」

下から女の声がする。

今の俺の状況。

木から落ちている真っ最中。
てへ

「げほっ！」

「大丈夫ですか?!」

い……息ができねえ！

結論、背中から落ちた。

「あ、ああ大丈夫だ……。」

「あ……。」

両腕の中にいる子猫を女に見せる。

女は子猫を抱き上げる。

俺の瞳にはその姿が子をあやす母親のように穏やかに写っていた。

「その猫はアンタのか？」

「いえ・・・偶々鳴き声が聞こえたので・・・」

「そっか。」

立ち上がり、付着した砂を払う。

「っで？どうすんの？」

「家で育てようかと思っています。」

「ふん・・・あ!!」

「え！？どうかしたんですか?!」

今気づいたんですけど・・・部屋の鍵しめたか？

脳内リピート開始。

冷蔵庫開く 驚愕 行ってきます 家出る 自転車に乗る。

閉めてない・・・。

「ヤッバアアイ!!」

「にゃ?!」

女と子猫はもう俺の瞳には映ってなどいない。

ダッシュで公園から出ると自転車に乗り、音速でペダルを漕ぐ。

泥棒勘弁！

今のは四文字熟語じゃないからな！

「よし着いたああ!!」

荷物を手に持ちドアの前まで移動する。

ドアノブを握ると同時に・

ガタン

音がしたあああ!!

泥棒か?!

「くっ・・・捕まえてやる!」

軽く2、3回深呼吸をする。

ギュッとドアノブを握りしめ・・・。

「この泥棒があああ!!」

叫びながらドアを勢い良く開いた。

「おかえり。」

部屋にいたのは泥棒などではなく大きな布を持った総司だった。

「・・・。」

「茜? 照る照る坊主作ろう」

数秒後、町内に総司の悲痛な叫び声が木霊した。

雪と転入生

「体の調子はどうかね？」

笑顔でそう聞いてくる白衣を身に纏った中年オヤジ。首には荒木弘則あらかしひろのりと書いてある名札をぶら下げている。

「時々右の握力がなくなります。」

「そうか……。どの位の間隔だね？」

「極まれでしたが……。最近は早くなった気がします。」

「ふむ……。脳内をチェックしておこう。隣の部屋へ。」

荒木先生の表情が僅かに強ばったのを俺は見逃さなかった。

く雪と転入生く

病院での診察を終えた俺はそのまま学校に向かった。教室の前につくと時計の針は2限目終了10分前を指していた。さて……。目立つのは余り好きじゃないんだけどな……。

「おはようござんす。」

ドアを開くと同時に挨拶をする。

「あはよう茜君。早く席に着いてください。」

教卓の前に立っているのは担任の水沼みすぬまさゆり小百合先生。
美人で24歳の独身。

そう言えば今日の2限目は古典だったな・・・ツいてねえ・・・。
椅子に座る。

視線を感じる。

前を見る。

先生は俺を見ていて、視線が合うとニコリと笑った。

「では遅刻してきた茜君には私の出す問題に答えてもらいましょう」
「

うっ・・・マジかよ・・・。

ちなみに古典は俺の苦手教科なのですよ。

「そうですね・・・源氏物語の主人公は」
「

光源氏っす！」

これは・・・楽勝

「ですが」
「

なぬ！？

フェイク！？？

「羅生門を書いたのは誰でしょう？」

源氏物語も主人公も関連性0カロリーかよ！！

「分か」

「仕方ないです。ヒントは『あ』で始まり、『け』で終わります。」

分からないと言っているのに……。

『あ』で始まり、『け』で終わる……。

考える。

ない頭をフルに使う。

しかし、ない頭をフルに活用しても意味はなく、答えは分からない。

もう……どうにでもなれ！！

「あ、芥川竜之介！」

シーン……。

ん？

……何ですかこの空気？

「小癪にも正解です。」

ハハハ……そう言う事ね。
普通に答えちゃったからツマラなくてシラケたわけね……チクシヨ
ウ……。

くっ！クラスメートと担任からの視線が痛い……。
そんな中、授業終了を告げるチャイムが教室に響きわたった。

「あらあら、チャイムが鳴りましたので終わります。」

切り替え早!!

小百合先生は颯爽と教室を後にした。

そして颯爽と俺の前に野郎が姿を表した。

「おはよう、空気を読めなかった茜さん。」

「……おはよう。」

もちろん総司だ。

あ、皆の視線が無くなった。

『てめえら切り替え早すぎだって』と思いつつ安堵する俺。

「雪……降らなかった……。」

「あ？ああ……そうだな……。」

窓越しの空は曇ってはいるものの雪も雨も降ってはいない。

ちなみに昨日、照る照る坊主は作ってませんから！

さらに言えばマッハで総司を部屋から追い出しました！

「なんだアレ？」

気づけば斜め前の机に群がるクラスメート達。

まるで獲物をロックオンした肉食獣のような眼光を放っている。

おもに男子が……だ。

「転入生に質問しているんだよ。」

「へえゝ・・・。」

転入生がいたんだ・・・？
全く気づかなかった・・・。

「どんな奴？」

・・・何だよその笑みは。

「可愛い女の子だよ」

「ふうゝん・・・。」

・・・興味なし。

チラリと時計を見て時刻を確認。

鞆の中からビニール袋を取り出す。席を立ち、歩きだすと無言で総司も付いて来た。

「お前も来るのか？」

総司の手には弁当が握られている。

この時点で答えはイエスなんだろう。

「ちょうどお腹減ったしね。」

「また来たのか？」

中に入ると呆れ顔でそう言われた。

声に出したのは、髭を生やしたこのオッサン。

名前は河野翔太先生。かわのしょうた

先生と言っても保険室の先生だ。

「いいじゃん別に。？」

「全く・・・メシ落とすなよ？」

「「はあい。」」

背中を向け仕事を始める須山先生。

少しこの先生に触れておこう。

小百合先生に恋する32歳独身。

俺達からは『ヤッサン（親父さんの意）』の愛称で親しまれている。
以上！！

小百合先生とは、まさに美女と野蛮人だ。

間違った、野獣だ。

「いただきますあす」

総司は既に弁当の蓋を開けて、食べ始めている。

俺もコンビニ袋からオニギリを1つ取り出し、食べれるように周囲のビニールを剥がす。

「よし。いただ」

ポトツ・・・。

床にはさつきまで右手にあったオニギリがある。

俺の視線の先には小刻みに震える右手。

また・・・握力が無くなった。

イヤな汗が体中から吹き出る。

「もう・・・何やってんのさ。」

ビクツ・・・

床に落ちたオニギリは総司がヤッサンに気づかれないように急いでビニールに突っ込んだ。

「気をつけ・・・茜??」

「な、何だ?」

眉間に皺を寄せた総司が俺を見ってくる。

「顔色悪いよ。気分でも悪い?」

「大丈夫だ。早く飯食おうぜ?」

逃げるように別のオニギリを右手でつかみ取る。

しまった!と思ったが右手はいつものように力が入り、動いてくれた。

「本当に大丈夫?」「心配し過ぎなんだよ・・・。」
《ピンポンパンポン》

スピーカーから音が発せられる。

何だろうな？

ま、俺には関係ない

《1ー3の茜君・・・今すぐ職員室まで着てください。》

「あゝあ期待裏切るなよ、チクショウ!!」

スピーカーからした声は間違いなく小百合先生だ。

・・・イヤな予感がしてたまらねえ・・・

「ドンマイ茜。」

爽やかな笑顔が勘に障るぜこの野郎！

「茜！貴様、何をした！何で小百合先生に呼び出された!？」

ヤッサンがウルサイ・・・

「サボリがバレたと思えねえ!。」

「く・・・サボると小百合先生に呼び出されるのなら・・・俺も仕事をサボれば・・・フッフッフ・・・」

ヤッサンを無視して出て行ったのは言うまでもないだろう。

いい加減、足が痺れて痛い・・・。

「反省しましたか？」

椅子に座り、優雅に珈琲を飲む小百合先生が素敵な笑顔で俺を見下す。

「したした！だから・・・もう正座といて良いだろ！？」

呼び出されて職員室に入ると額に青筋を浮かべた小百合先生様の命によりザ・正座をさせられたのだ。

あ・・・足が・・・

「まあいいでしょう。」

速攻で足を崩す。

はあ・・・極楽極楽。

「あ、来たみたいですね・・・綾瀬さん、こっちですよお」

小百合先生は誰かに手を振っているようだが興味なし。
足の痺れをとることが優先だい。

「すみません遅れてしまいました。」

走ってきたのだろう、息が乱れている。

「良いのよ。まだ慣れてないからしかたない事よ。それでは茜君。」

「・・・何？」

「罰として綾瀬さんに学校案内してあげて。」

「いやいや罰つて、正座したじゃん・・・。」

「あんなもの罰のうちに入りません。」

小百合先生つて俺の事嫌いなんだろうかね・・・。
実に悲しい。

「では私は仕事があるから宜しくね。」

そして職員室を強制退場させられた俺と女子生徒。

「ひとまず・・・アンタ誰？」

さつきから抱いていた疑問を口にする。

「今日この学校に転入してきた綾瀬あやせなみ七海です。クラスは1 - 3です。」

「・・・あ・・・。」

刹那

頭の中のスクリーンにアイツの笑顔が映し出された。

「・・・あのう・・・どうかしましたか？」

「え？・・・いや・・・。良い・・・名前だな。」

「あ、ありがとうございます。」

「じゃ・・・行くか。」

心配そうに見てくる綾瀬から視線を外し、歩き出す。
少し遅れてトコトコと綾瀬が付いて来る。

「・・・名前を・・・教えていただけませんか？」

「綾瀬がその他人行儀を止めるならな。」

「え・・・分かった止める。だから教えて。」

「須藤茜だ。ほら、昼休みの時間すくねえんだから急ぐぞ？」
「うん！」

「つでここが体育館だ。」

「わあゝ大きいんだねえ！」

昼休みだけでは校内全てを案内し終わることができず、結局放課後の時間もつかう羽目になった。

そして今案内した体育館でコンプリートだ。

「なあ綾瀬・・・」

瞬時にキツと睨んでくる綾瀬。

・・・何故に？

「綾瀬じゃなくて七海って呼んでってさっきも言ったじゃない！」

・・・その事ね・・・。

「あや」

「な・な・み！」

尚も睨む綾瀬。

確かに俺は他人行儀を止めれと言ったのは俺だが・・・だから言
つていきなり名字じゃなくて名前を呼べと言うとは・・・。

「・・・七海。」

「なあに??」

名前で呼ぶと笑顔になる綾瀬。

なんか・・・コイツ苦手だ。

まるで総司並みに扱いが難しい。

・・・っとコレは横に置いて・・・。

「前に俺と会ったことないか？」

そう・・・あや・・・じゃなくて七海の顔を前に見たことがある気がする。

「ふむ・・良かったら今から家に来ない？」

「はい？」

脳がぶっ飛んでんのか？

本気でそう思うぞ。

「答えはそこに居るよ。」

「・・・。」

意味が分らない。

しかも答えがあるんじゃないやなくて居るのか？

て言うかやつぱり会ったことあるんだよね？

「よし、では家までレッツゴー」

「わ、ちよつと待」

七海は俺の手を掴み走り出した　マズい！
そう思った時には遅かった。

俺は右膝から地面に倒れた。

ガシャンと人間の体から出るはずのない音をたてて・・・。

「・・・今の音は・・なに？」

顔を上げると驚きの表情の七海と小さな白い物体が視界に入った。

雪と転入生（後書き）

何故か【光】より更新が早い・・・。

秘密とミルク（前書き）

お久しぶりです。

秘密とミルク

空を黒く染めた雲から雪が舞い落ちる。
少しずつ舞い落ちる。

やがて雪は俺にも七海にも落ちて、消えていった。

「今の音は・・・何？」

ジーツと俺の目を見つめる七海。

誤魔化せない、直感的にそう思った。
あまりにも見つめてくる瞳が綺麗で・・・まるで俺の心を見透かしているように見えたから。

「何の音・・・だと思う？」

質問に質問で返すのは卑怯だと思う。

・・・試したかったんだ。

コイツがどんな回答を口にするかを　。

「悲しみの音。実際は鉄類の音な筈だけど私には悲しみの音に聞こえた。」

「・・・そっか。」

まるで同じだった。

アイツが答えてるんじゃないかって思う程に同じだった。

「障害者。」

「え？」

真剣な表情から一転し、驚きの表情になる。

「だ・か・ら！俺は障害者なの。」

「い、いきなり何を言ってるの？」

右足のズボンを上にメクル。

露わになるの右足に彼女は息をのむ。

「昔・・事故って右足ないんだ。」

「義足・・？」

「正解。」

露わになった右足は機械だ。

錆びにくく軽い鉄類で作られた人工的機械足らしい・・・。
俺も詳しくは知らない。

「さっきの音はコイツが出した音だ。」

少ししてから七海は悲しそうな表情になった。
でも俺の嫌いな視線は向けてこなかった。

『同情』

義足を見た人間は大抵この視線を俺に向けてくる。

俺はその視線が嫌いだ。

だけど七海は俺に同情していない。

それだけが嬉しかった。

「・・・全然気づかなかった・・・。」

「だろうな。俺の義足は特別製だ。神経が義足と繋がっているから
思い通りに動くからな。そのおかげで親友以外の生徒は誰も俺が義
足だなんて知らない。」

思い通りに動くとは言え長時間動かすことは体に負担がかかるため
体育はドクターストップなのだ。

「じゃ・・・私が知っている人第2号なんだ？」

え？何で？！

「何がそんなに嬉しいんだ？」

彼女は笑っている。

先程の気まずい雰囲気吹き飛ばす程に・・・笑っている。

「貴方と私に『秘密』って言う特別な繋がりができたから。」

「なっ！？・・・恥ずかしくないのか？」

「何が？」

・・・天然？

あんな恥ずかしい台詞を吐いて・・・『何が』って・・・。
ため息を吐いてからズボンを元通りにする。

「帰る。」

それだけを伝えて歩き出す。

「ま、まって！一緒に帰ろうよ。」

「はいはい。」

「お前家ドコ？」

自宅をもつ目で捉えた俺は七海に質問をする。
辺りはもう暗い。

遠いのなら送っていった方が良さだろうと判断した上での質問だ。

「あれ？聞いてないの？」

そんな俺の考えを知らない彼女は理解不能な事をおっしゃったのだ。

「・・・何を、誰に？」「私の家を小百合先生にだよ。」

俺が首を横に振ると彼女は目を丸くした。
所謂、『マジで?!』って言う目だ。

「茜君はさ・・・何で自分が学校案内役になったか知ってるよね？」
「サボった罰だろ？」

哀れみの目で俺を見るな。

「本当に小百合先生から何にも聞いてないんだね？茜君が案内役に抜擢した理由はね、放課後までかかる学校案内の後に一緒に帰れるように先生が考えたからだよ。」

言い終えると七海は立ち止まった。

そして右手をスツ・と上げ、右側方を指差す。

「私の家は此处。」

「……………」

七海の住む家を見て、言っていた意味を理解できた。

昼休みだけじゃ終わるはずない学校案内。

放課後、終わった後に彼女と違う方向に帰る生徒より同じ方向に帰る生徒を選んだ方がいい。

隣のアパートに住む俺は『役』にうつてつけどったわけだ。

「そう言う事か……………」

「そう言う事だね。」

ニコツと笑う彼女。

コイツ……よく笑うよな。

「あ！ちよつと待っててね！？」

そう言つて、玄関に消えていった彼女。

……………何が起こるんだ？

待つこと数分。

彼女が家から出てきた。

両手に何かを抱えて・・・。

「はい。」

渡されたソレはとても可愛い・・・

「ニャー。」

白い毛並みの子猫だった。

人懐っこいな。

全然暴れねえーや。

「茜君、思い出した!？」

ズイツと体を近づける七海。

彼女の顔との距離は僅か数センチ。

良く見ると・・・なかなか可愛い・・・じゃなくて!!

「ねえ思い出した!？」

「・・・近い・・・な？」

「え・・・あわわわ?!」

素早く離れる七海。

顔が一気に真っ赤になった。

あ、耳まで赤いや。

「つで、なんだっけ？」

「あう・・・だから・・・その子猫見て何か思い出さない？」

「……………」

視線を完熟七海から腕の中の子猫に移す。

「……………寝てる。」

気持ちよさそう寝てるね。

「つてオイ！」

この子猫は……昨日助けた子猫？」

「お前さあ……昨日木を登ろうとしてたりした？」

「うん！ようやく思い出したんだね？」

「ああ。」

その後の思い出したいくない事もついにな。

「だから私と茜君は今日が初対面じゃないんだよ？」

「おう……。コイツの名前決めたのか？」

「決めたよ。白いから『ミルク』だよ。ちなみに女の子。」

「ミルク……」

名前を呟くとミルクは目を開けて、俺の顔をのぞき込んできた。

「とりあえず返すな。」

「あ、うん。」

ミルクを七海に引き渡す。

「晩飯の用意もあるから俺帰るな。」

「今日はありがとう。」

「ああ、じゃまた明日。」

「また明日。」

彼女に見送られながら俺はアパートの部屋に帰った。

晩飯を作ろうとしたが・・思いのほか疲れていたようで、風呂に入
ってからすぐに寝てしまった。

また・・悪夢を見てしまうと知りながら・・。

秘密とミルク（後書き）

茜が義足である理由はまた後の話で分かりますでお楽しみにしてま
っていただけると嬉しいですよ。

喧嘩と猿顔

ここは何処なんだ？

ふと気がつくと周囲は何も見えず真っ暗だった。

「　　っ！？」

周りの闇が眩い光により消し飛ばされた。

と同時に急な光りに瞳の順応がついていける分けなく、瞬時に瞼をおろした。

「・・・きみ・・・だい・・・か・・・？」

何か・・・聞こえる。

人の・・・声？

光に慣れ始め、閉ざしていた瞳を少しずつ開いていく。

「君！大丈夫か！？」

え！？

目の前に居たのは紛れもなく荒木先生だった。

先生の表情は真剣さと焦りが入り交じっているように見えた。

刹那

何処から泣き声が聞こえた。

聞き慣れた泣き声に俺はそれが誰かが直ぐに分かり、立ち上がろうとして・・・立てなかった。

早くアイツの所に行かないと！！

だが、またしても立ち上がることは出来ない。

言うことを聞かない身体に怒りを覚え、足を睨んだ。

そして俺は信じられないモノを見てしまった。右足が・・・ない？
確かにあるはずの足が、
膝から下が無くなっており、血が溢れ出していた。
やがて俺の中で止まった、時間と言う概念は

「うわあああああ！？」

叫び声と共にまた動き始めた。

第5話《喧嘩と猿顔》

「ハア・・・ハア・・・」

朝から嫌な汗が身体中から溢れ出る。

くそ！

取り外していた義足を着けて風呂場に向かう。

やや乱暴に着ていた衣服を脱ぎ捨て、風呂場に入りジャグジーを捻る。すると頭上から温かいシャワーが降り注ぐ。

「何で・・・毎日の様に性懲りもなく！」

悪夢。

別に毎日見ているわけではないが、かなりの頻度でみてしまう。
その度にシャワーを浴びて心を落ち着かせるのだ。

「・・・ふう。」

ジャグジーをまた捻り、シャワーを止める。

風呂場を出て、全体をタオルで拭き終わると、制服に身を包んだ。そして、いつも通りに朝食を作っては食べて、片付ける。

あとは鞆を手に持ち

「・・・行ってくるよ。」

家を出る。

しかし覇気はない。

あの悪夢のおかげで朝から鬱だ。

「おはよう！茜君。」

ここでイレギュラーが起きた。

て言うか起こされたんだと思う。

もちろん故意的に・・・だ。

「あや・・・七海。」

綾瀬と言おうとしたら、一気に彼女の目つきが鋭くなった。

だが言い直すと鋭くなった瞳はノホホンとしたものへと変わった。

・・・危なかった。

「なあに？」

「なぜ俺の部屋の前にいやがる。」

「一緒に学校に行こうかなあ〜と思って待ってたの。」
「・・・あっそうかい。」

鍵を閉めて、スタスタ歩き出す俺。
今は夢のせいで七海と楽しく会話できる状態じゃないんだ。

「ちよつと〜、待ってよ!」

俺の後ろをトコトコと付いてくる七海は、すぐに俺の隣に肩を並べた。

「???茜君元気ないね?どうかした?」

「いや・・・何でもない。」

「・・・そう。」

一瞬、彼女は悲しい瞳の色を見せた。

だが俺は彼女が悲しむ意味が分からなかった。

だってまだ出会って2日目だ。

理解するには短すぎる。

「あ、あのね!今日は茜君のお弁当作ってきたんだよ。」

「・・・へえ〜 へ?弁当??」

「えへへ。昨日のお礼とミルクを助けてくれたお礼。それでね」

とても楽しそうに話す彼女を見ると・・・何故だろう?

心の中のうやむやが驚く程にすう・・・と消えていく。

重かった足取りも今では軽やかに動いてくれる。

「おはよう!」

教室に入ると爽やか少年こと総司が近寄ってきた。

「綾瀬さんと一緒に来たの??」

「そうだけど。」

俺達のやり取りの後に騒がしくなる教室。

徐々に俺へと集中する視線。

・・・なんだ!?

「あの・・・須藤が・・・!？」

俺が何!?

「なぜ・・・綾瀬さんと一緒に!？」

え!?

だって家の前にいたんだもん!!

そう口に出そうとした時に、ポンと俺の肩に手が乗った。

振り向くとやたら良い体格をした猿顔の男が俺を睨んでいた。

「あ?なんだお前。」

「ちょい面貸せや。」

と言いつて今はトイレにいる俺と猿顔。

そして、まだ睨んでくる猿顔。

なぜに睨む?

・・・まさか・・・!?

「俺にそっちの趣味はないぞ?」

「ふざけるな！俺はゲイじゃない！」あ・・違ったのか。良かった。

内心ホッとしていると奴は俺の胸ぐらを掴み、顔を寄せてくる。
・・さっきの話は嘘だったのか！？

「二度と綾瀬に近づくな！」

「・・・・・へ？」

「だから二度と綾瀬に近づくなと言ってんだよ！」

今になってようやく理解できた事。

コイツは綾瀬に気があり、俺を脅していると言つこと。
さらにコイツはゲイではないと言つことだ。

・・いつまでゲイを引っ張ってんだろう俺は？

「お前・・ウザいな。」

あ、言っちゃった。

案の定、猿顔の生徒は顔を真っ赤にして睨んでいた。
やべえ・・変顔にしか見えない。

「ぶっ・・猿みてえだぞ。」

あゝ俺ってば正直。

ええ、もちろん猿はキレていますとも。

「て、てめえー！」

近距離で殴りかかってきた猿。

それに対して俺は至って冷静だ。

「ほい。」

「な!？」

軽々と避けた俺に、猿は驚愕している。

その隙に俺の胸ぐらを掴んでいる手を振り払い、左足でローキックをする。

「痛っ!？」

痛そうな猿顔で体勢を崩す猿。

すかさず、鳩尾に渾身の右ストレートをめり込ませる。

「がふ!!げほ・げほ・。」

「次から相手を見て喧嘩しな。」

未だに咳き込む猿顔に捨て台詞を吐いて教室に戻った。
そして、また騒がしくなる教室。

「茜君!大丈夫だった!？」

「お、おう。」

走って近付いてきた七海にちよつと驚いた。

しかも七海はウルウルな涙目で俺を見てくる。
つたく。

そんな顔するなよな・。

七海の頭に手をポンと乗せて、撫でる。

《あああああ!!!》

あー！外野（主に男）が五月蠅い！！

「心配しなくて大丈夫だったから。」

「うう……。本当に怪我とかない？」

「大丈夫だって言っただろ。」

「うん……。あとね、はは恥ずかしい……。かな？」

少しだけ頬を紅くしていたので直ぐに手を離れた。

「ね？だから茜なら大丈夫だって言っただでしょ？」

何処からともなく姿を見せた総司。

心配している素振りも見せない。

ま、昔からの付き合いだから分かるか。

俺が今まで一度しか喧嘩で負けたことがない事は。

「朝からお疲れ様だね。」

「ああ。と言うことだ。」

「と言うことだね。」

大事な部分を跳び抜かした会話に七海は可愛らしく首を傾げている。
そんな七海をよそに教室をでる。

「あ、七海。」

下の名前で呼んだからだろうか？

またまた教室が騒がしくなった。

お前等シツコいよ？

「後で上林理沙^{かんばやしりさ}って奴に俺が宜しくと言っていたって伝えといて。」

「べつ良いけど・・・何処に行くの？」

「俺らの秘密基地さ。」

「・・・え？」

廊下から総司が呼んでいたので急いで教室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461e/>

メモリー～君と過ごした日々～

2011年1月16日14時28分発行